

コレラ禍で殉難した沼野玄昌

わが国でのコレラの流行は、1822（文政5）年、1858（安政5）年、1862（文久2）年と幾度かある。衛生知識を持たなかった当時、酷烈な伝染力に抗すべき術がなく、その防疫活動が理解されず悲惨な事件があった。

1877（明治10）年に西南戦争が勃発、戦線でコレラが発生し、帰還兵によって全国に感染が広がった。同年9月には千葉県鴨川町でコレラ患者が発生したため、小湊の医師沼野玄昌（1836～1877）が死者の火葬や井戸の消毒などを行っている。また、11月に鴨川でコレラ患者が発生した際も、防疫のために患者を隔離し、患者の家の井戸を石灰で消毒していた。ところが、玄昌が井戸に毒を入れ患者の生き胆を抜くという噂が流れ、それを妄信した住民が玄昌を襲い殺害し、死骸を加茂川に投げ込むという事件が起こった¹⁾

事件後遺体が発見された加茂川沿いの汐留松原には、事件に加わった加害者をはじめとする住民が7回忌の供養碑を建立した。1978（昭和53）年には新たに弔魂碑が建てられている（写真1²⁾）。烈医沼野玄昌先生弔魂碑には「…明治十年全国を流行せるコレラが鴨川地方を浸延し、罹患するもの四百余名に及ぶや明治政府終に官令を発して、先生をしてその治療と防疫に当たらしむ。先生身を挺して急地にのぞみ、施療防疫に従事するも、恐怖に戦く大衆は消毒用薬液を反って毒薬の如く妄想し、ついに暴徒と化して、先生を急襲し、加茂川河畔において撲殺す。…」と弔魂碑に記されている³⁾。また沼野家の菩提寺である妙蓮寺参道に、玄昌碑がある。（写真2）

玄昌は佐倉順天堂で西洋医学を学び、1867（慶応3）年には幕府医学所で種痘法の技術を身につけて、伝染病対策に取り組んでいた人物であった。事件の背景には、コレラという新しい伝染病への恐怖と不安に加え、玄昌自身も近代医学の発展普及への熱意が先行していたため、人々の理解が追いついていけなかったという面もあった³⁾。

2020（令和2）年1月から日本全国を震撼させた新型コロナウイルス感染症（COVID-19）蔓延の際、横浜港でクルーズ船の対応に当たった医師等が、職場において「バイ菌」扱いされる差別に晒されたとして、所属学会が抗議声明を出した⁴⁾。その後も、医療現場



写真1 汐留公園（鴨川市）の烈医沼野玄昌先生弔魂碑



写真2 妙蓮寺（鴨川市）の玄昌碑

で人命を救うために自分の身を危険にさらして活動している医療者の子供が通う保育園・幼稚園から登園自粛を求められる事態など、信じがたい不当な扱いを受けた事案も報道された。背景には、140年前に起こったコレラへの恐怖や不安と同様で、同じ医療者として看過できない思いがある。

参考資料

- 1) 立川昭二：ある殉難碑，明治医事往来，60～66，新潮社（1986）
- 2) 諸澄邦彦：沼野玄昌，医療史跡探訪 医学史を歩く，157～159，医療科学社（2016）
- 3) たてやまフィールドミュージアム：http://enjoy-history.boso.net/book.php?strID_Book=0017&strID_Page=045&strID_Section=01
- 4) 日本災害医学学会理事会：新型コロナウイルス感染症対応に従事する医療関係者への不当な批判に対する声明，https://jadm.or.jp/sys/_data/info/pdf/pdf000121_1.pdf#search=

（日本診療放射線技師会 諸澄邦彦）